

令和6年11月29日

(2024年)

保護者の皆さま

吹田市立佐竹台小学校

校長 山田敬司

令和6年度全国学力・学習状況調査の分析について

本年度4月に、6年生を対象として「令和6年度全国学力・学習状況調査」を実施し、9月上旬に個人ごとの結果をお返ししました。また吹田市でも、今回実施した調査結果の概要を吹田市のホームページを通じて公表しております。

この調査は小学校の最終学年のみを対象とした調査であり、教科も国語と算数に限られ、測定されたものは学力の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。そのことをまず踏まえつつ、調査によって得られた課題を明らかにし、その改善に全力を注ぐことが、調査本来のねらいであると考えています。

対象となった6年生には、よりきめ細やかな指導ができるよう取り組みを進めるとともに、学校全体として課題に応じた学力向上につながる具体的な指導法の工夫改善も図ってまいります。各ご家庭におかれましても、以下の分析結果をもとに、今後の家庭学習の指針として、参考にさせていただきますようお願いいたします。

1. 調査内容

- ◆教科に関する調査 国語・算数に関する調査
- ◆児童質問紙調査 生活習慣や学習環境・学習方法等に関する調査

2. 調査結果の概要と課題

- ◆調査結果の概要
 - 国語 全国値を上回っている
 - 算数 全国値を上回っている

- ◆正答率の低い問題から見える課題について
誤答から課題を明らかにするために、正答率から課題等について取り上げました。

○できた点 ●課題となる点

教科	領域	正答率から見える課題等
国語	知識及び技能	○全ての問題で全国値を上回っている。
	思考力 判断力 表現力等	○「話すこと・聞くこと」領域と「読むこと」領域は全国値を上回っている。 ○物語を読んで心に残ったことを記述する課題は全国値を上回っている。 ●話し方の工夫を選ぶ設問は全国値を上回るものの正答率が低い。 また「書くこと」領域では、全国値は上回っているが、文章を書くときに書き表し方を工夫したり、自分の考えを書いたりすることに課題がある。 ●学校の良さについて、メモをもとに説明する人物の立場になって記述する問題に課題がある。 ●目的や意図に応じて伝え合う内容を検討し、伝えたいことを明確にする問題では無回答率が全国値よりも上回っている。

教科	領域	正答率から見える課題等
算数	数と計算	○記述問題や回答に対して理由を書く問題では全て全国値を大きく上回っている。 ●正答率が低い問題は無回答率が全国値よりも高く、出来ない問題には取り組まない傾向がある。
	図形	○全ての問題で全国値を上回っている。 ●球の直径の長さや立方体の一辺の長さの関係を捉え、そこから体積を求める問題は全国値を上回るが正答率が低く、図から関係を捉えることに課題がある。
	変化と関係	○全ての問題で全国値を上回っている。 ●道のりが等しい場合の速さを比較して説明する問題は全国値を上回るが正答率が低い。また説明を記述することに課題が見られる。
	データの活用	○全ての問題で全国値を上回っている。 ●折れ線グラフを読み取り、与えられた求め方を活用して問題を解く問題に、問われたことを正しく答えることや示された情報を正しく理解することに課題がある。

3. 教科に関する分析と今後に向けて

国語

本校の平均正答率は全国値を上回っている。

日頃の朝の読書や図書時間・読書ボランティアによる読み聞かせなどの取り組みで、本に興味を持つ子どもが多い。本に親しみ読書活動に取り組んできた結果と思われる。また児童質問紙の「家にどのぐらいの冊数の本がありますか」の質問でも、全国値を上回っている結果から、読書が出来る家庭環境が多いことも影響しているのではないかと考える。

国語科の学習において、「話すこと」や「書くこと」だけにとどまらず、相手に伝えるにはどうすればよいかを意識させ、どんな工夫ができるかを共有することが必要である。教育活動で自分の考えを表現する機会を意識的に設けて、相手に伝える表現方法を学ぶ指導を行っていく。

算数

本校の平均正答率は全ての問題において全国値を上回っている。
どの項目についても全国値を上回っており、良好な結果であった。

1. 「数と計算」

問題場面の演算決定は、算数科の学習において形式的に何算かを判断させるのではなく、「～だから○算」と根拠をもって説明できるようにする。自分と意見が違うときには、なぜ違うのかと相手の考えを理解させるような場面を意識的にとり、内容が定着したかを確認する指導をする。

2. 「図形」

図から関係を捉えることは、単純に教科書プリントなどの平面上では捉えにくいことがあるので、単元の導入やまとめなどで実物を用意して実際に目で見たり測ったりする経験を積ませる。

3. 「変化と関係」

記述での説明が不十分であるという課題を解決するためには、自分の考えを表現する機会を十分確保して、説明する機会をとり、指導をする。

4. 「データの活用」

示された情報を正しく理解するためには、自らが必要性をもって情報を集め、表にまとめたり、表からわかることを表現したりすることで定着させる指導をする。

4. 生活習慣や学習環境に関する調査の傾向と今後に向けて

自分自身のこと	自己肯定感 自己有用感 将来の夢	<p>「自分には良いところがある」については全国値を大きく上回っており、自己肯定感の高さが伺える。</p> <p>「将来の夢や目標を持っていますか」の質問にも全国値を大きく上回っている。</p> <p>本校では人権教育の取り組みとして「もちあじ」や「いいところみつけ」などで自己分析をして、友だちのやさしい行動や気持ちを見つけ、クラスで発表している。友だちとの関わりに重きをおくことで友だちや先生から声をかけてもらうことが多くなり自尊感情を高め、自信をつけることにつながると考えている。</p> <p>「人が困っているときは、進んで助けますか」の質問紙は肯定的な回答が全国値をやや下回っている。進んで困っている人を助ける姿を価値付け、助け合うことは気持ちよく集団生活を送るためにも大切であることを伝えていく指導をする。</p>
家庭生活 学校生活	生活習慣	<p>「就寝時間については決まっている」については全国値とほぼ同じ。「起床時間については決まっている」「朝食を毎日食べる」については全国値を上回っている。生活リズムができ、規則正しい生活ができている家庭が多い。</p>
	家庭学習	<p>「わからないことや詳しく知りたいことがあった時に、自分で学び方を考え工夫することができていますか」の質問にも全国値を大きく上回っており、目標を立てたことに前向きに取り組む姿勢が見られる。</p> <p>教科について「国語、算数、英語は好きですか」の質問は全国値を大きく下回っている。</p> <p>授業の内容がわかる、学習が大切だということは質問紙から全国値とほぼ同等の回答率だが、国語、算数の回答率は全国値よりも上回っており、学力は高いが好きの回答率は低い。</p> <p>「理科が好きですか」の回答率は全国値を大きく上回っており、生活に密接した身近な学習内容に興味があることがわかる。国語、算数も子どもたちから疑問を持ち、自らが解決して考える授業にしている。</p>
	友達関係	<p>ウェルビーイングの質問紙 普段の生活の中で、幸せな気持ちになることがどれくらいありますかの質問では9割が肯定的に回答しており、全国値とほぼ同等である。しかしクラスで数人は幸福感を感じない子どももいる。自己肯定感が低いと幸福感も低いと、様々な背景を抱えていることも原因とされる。家庭との情報共有を進め、子どもたちの思いに注目し、少しでも学校が安心できる居場所となるように考えていく。</p>
	ICT機器	<p>授業中での ICT 機器について、5年生までの使用頻度は週に3回以上が1番多く、全国値をやや下回っている。</p> <p>「自分のペースで進められる。調べたいことはすぐに調べられる。楽しみながら学習できる。映像や音声を活用する。意見や考えを伝える。友だちと意見を共有する。協力しながら学習する。」の項目全てが全国値とほぼ同等の肯定値であった。</p> <p>使用頻度が全国値と比べて低いことから、ICT の強みを生かして、端末の使用を継続していく。</p> <p>また総合的な学習などで、「情報を計画して収集し、調べたことを発表する」が全国値を下回っている。ICT で調べることは学習で取り組んでいるが、発表する機会が少ないと考えられる。今後はプレゼンテーションなど、グループ発表やクラス全体などで発表する機会を設</p>

		<p>ける。</p> <p>家でのスマートフォン・PC の使用は、ゲームをするは1日に1～2時間が最も多く全国値を上回るが、全体として平日の1日のゲーム時間は短い。4時間以上の使用をするも1割はいる。また動画や SNS の平日1日の使用時間も1時間未満が最も多く、全国値とほぼ同等だが、4時間以上使用しているも1割はおり、二極化している。</p> <p>端末の利用にはこれから先は増加傾向と考える。親しんで関わらせ、使用の管理もデジタルシティズンシップ教育などで学ばせていく必要があると考える。</p>
地域や社会	地域行事 地域貢献	<p>「地域や社会をよくするために何かをしてみたいと思いますか」の質問では8割以上が肯定的に回答しており全国値とほぼ同等である。臨時休業になったコロナ禍から昨年度にはほぼ地域行事が戻っている。3年間はコロナ前の地域行事がなかったが、ようやく再開し、参加出来ることで地域と関わり、地域の良さや自分たちもやってみたいと思う子どもが増えてきたように考える。生活科や総合的な学習などの授業の中でも、地域や社会に関わることのできる取り組みを設定していく。</p>

5. 今後の取り組みについて 自己肯定感・自己有用感を高めるためには

保護者からの遅刻早退欠席連絡はさくら連絡網の導入により、お子さまの体調や様子が即座にわかることで電話対応などが迅速に行えるようになりました。

学校生活においてはさまざまな問題が起こりますが、解決に結びつくには早期発見で対応することが不可欠だと思います。学校からの連絡では、様子の報告だけではなく、ご家庭に協力をお願いをすることもあります。共有することで、保護者と学校が同じ方向を向いて課題を取り除き、解決していくことがお子さまの安心につながると考えています。

お子さまからは毎朝行われるデイケン（デイリー健康観察）で、担任に伝えたいことや心とからだの健康観察を端末上で行います。入力された情報は瞬時に反映され、担任は子どもたちの困り感や相談に即対応することができます。

ICT 機器の恩恵には素晴らしいものがありますが、子どもたち同士をつなぐコミュニケーション力にも力を注ぎます。

児童質問紙の「学校に行くのが楽しいと思う」の質問では全国値を大きく上回っており、友だちとの人間関係の良好さや学習意欲などの高さが伺われます。

子どもたちは友だちと関わっていく中で、トラブルを起こします。しかし、それは困り感だけではなく、子どもたち自らが解決する力も育っていきます。友だちと関わる力はこれから先、成長していく過程で、自分を表現する力として必要となってきます。その素地を作るのは、学校での休み時間の経験や、遊びの中から学んで獲得していくのではないのでしょうか。子どもは生活していく中で間違いを繰り返しながら成長していきます。しかし、間違いを間違えて終わらせるのではなく、何が良くなかったのかを正し、次はどうするべきかを考えさせることが、大人の役目なのではないかと思えます。

自己肯定感・自己有用感を高めるために本校では、「もちあじ」や「いいところみつけ」などに学級づくりの1つとして取り組んでいます。どの子どもにも、よさや課題を含めてその子の「もちあじ」があります。互いに「もちあじ」を知り、友だちやクラスに受け入れられることで子どもたちは安心します。心が安定すると、人との関わりが良好になり、学習にも意欲的になります。

同じことが家庭にも言えます。子どもの感じ方はそれぞれ違いますが、例えば普段の何気ない「いってらっしゃい」の見送りや「おかえり」のたった一言にも、親御さんの愛情を感じ安心する子どももいます。そんな、ご家族の「あなたをちゃんと見ているよ」と温かいメッセージを送ることや、わが子の少しの変化に気づき「どうしたの？」と声をかけることで、親子の絆を深めお子さまの心が安定していくのではないかと思えます。今後も学校が安心した居場所となるよう、子どもたちの様子をていねいに見取り、良好な関係づくりの形成に支援していきます。保護者の皆さまのご理解とご協力をお願いいたします。